

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 文学 研究科 ドイツ文学 専攻		
研究代表者 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・ドイツ文学専攻・博士課程前期課程2年	浅見 治人 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学研究科ドイツ文学専攻・教授	坂本 貴志 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題	ヨーゼフ・ロートとオーストリア＝ハンガリー帝国——『皇帝の胸像』を手がかりに		
研究組織 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・ドイツ文学専攻・博士課程前期課程2年	浅見治人	
研究期間	2014 年度		
研究経費	(支出金額)	200,000 円 / (採択金額)	200,000 円

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

東方ユダヤ人としての出自をもち、ナチスの台頭によって活動の場を追われ亡命を余儀なくされたオーストリアの作家ヨーゼフ・ロートを取り上げ、亡命中の実際の行動とその間に執筆された小説『皇帝の胸像』をはじめとする作品世界から、そこへと至った背景やその根底にあるものを読み取り、この亡命期間中、ロートが祖国ハプスブルク帝国を理想化して描き続けたことの意義、また、ナチスドイツに対し、あるいはそのナチスドイツを生み、その後、未曾有の大戦に突入していく時代の流れに対し、ロートが生涯をかけ抵抗し続けたことの意義を明らかにする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ヨーゼフ・ロート] [亡命] [ハプスブルク]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2014 年度は、亡命期におけるロートの行動を時間の流れに沿って追いかけて、同時に当時書かれた作品や書簡をていねいに読み解いていくことで、この亡命期間中、ロートが祖国ハプスブルク帝国を理想化して描き続けたことの意義、また、ナチスドイツに対し、あるいはそのナチスドイツを生み、その後、未曾有の大戦に突入していく時代の流れに対し、ロートが生涯をかけ抵抗し続けたことの意義を明らかにしようと試みた。その過程で得られた成果を亡命期間中のロートの主な活動ごとにまとめ、その概要を示せば、以下のとおりである。

1. 亡命と君主制主義宣言

1933 年 1 月 30 日、ヒトラーが首相に指名されたとき、即座にドイツを去り、国外へ亡命した者は決して多くはなかった。事の成り行きを見守ろうとする者が大半で、本格的に作家たちの亡命が始まったのはこれよりほぼ 1 か月後の 2 月 27 日の「国会議事堂放火事件」以降である。ロートとはといえば、ロート自身の手紙や当時の関係者の証言などから、ヒトラーが首相に任命された数日後にはすでにパリにいたことが確認されており、2 月の中旬にシュテファン・ツヴァイクに書き送っている手紙の内容から、少なくともその手紙を書いた「国会議事堂放火事件」以前のこの時期にはロートが亡命を決断していたことがわかる。また同時代の多くの作家たちが事態を静観していた中、ロートのこの行動は、ロートがこの段階でナチス政権が成立したことの危険性、事態の深刻さを、いかに深く認識していたかを示すものといえよう。

それからおよそ 2 か月後の 1933 年 4 月 28 日、ロートはツヴァイクに宛てた手紙の中で、「非常に愚かで、野獣のような世界」を前にして、「君主制主義作家」として活動していく意志を明らかにする。それは一つには、ドイツにおけるナチスの「政権掌握」を契機として、かつての祖国ハプスブルク帝国への憧憬の念がいよいよ募り、その思いをロートがもはや抑えきれなくなったということもその背景としてあるかもしれない。しかしより直接的には、やはりナチスドイツの危険性を察した「本能」と、この野獣のような世界を許してはならないという「信念」が、この行動へ向けてロートを突き動かしたのではないだろうか。そのことを証明するように、これ以降ロートは、その野獣のような世界を支配し自らを異国の地へと追いやったナチスドイツに対し、一人の君主制主義作家として、生涯飽くなき戦いを挑んでいくことになるのである。

2. ナチスドイツとの戦い

亡命雑誌が次々と創刊され意見発表の場が整うと、ロートは自らを「君主制主義者」と呼び、ナチスドイツへの戦いを開始する。「ドイツと容赦なく戦うこと」をこの時代の作家の使命と公言し、君主制主義作家としてナチスドイツに対し、まさに「容赦なき戦い」を挑んでいったロートが、その際、効果的に用いたのが、ロートにとっての君主制国家のモデルとなるかつての祖国ハプスブルク帝国、ならびにその後継国としてロートが希望を寄せたオーストリアを理想化し、それによって浮かび上がらせた理想国家の持つ「高貴さ」と、ロートにとっての不倶戴天の敵であるナチスドイツ、あるいはロートがその前身と見なしたプロイセンからにじみ出る「卑しさ」とを対比させ、前者を称える一方で後者を蔑み、両者の差を浮き彫りにすることによって、野蛮で狂気のナチスドイツを徹底的に攻撃するという手法であった。例えばそれは、小説『美の勝利』における「モーツァルト愛好家の夫」と「ワグナー信奉者の妻」との対比や、エッセイ『グリルパルツァー』における「オーストリア軍」と「プロイセン軍」との対比において、より顕著に認められるのである。

3. 『皇帝の胸像』

すでに亡命誌に寄せた寄稿文の中で君主制支持の立場を明確に表明していたロートが、君主制主義者を主人公に選び、その生きざまを短篇小説という短い物語の中に「童話ふう」に描いた作品、それが『皇帝の胸像』である。現代という時代に生きる名もなき一人の人間に託して、改めて「君主制主義者」の立場を明確に示したこの『皇帝の胸像』という作品は、ナチスドイツを生んだ時代の流れに徹底して抵抗しようとするロートの意志がその物語世界の中に織り込まれたいわば「決意表明」の小説ともいえる。

この作品では、ロートがナチスドイツを攻撃する際にとった手法と同じように、主人公モルスティン伯爵にとっての理想の国家ハプスブルク帝国が称賛され、帝国崩壊後の世界とそれを招いた現在へと至る時代の流れが痛烈に批判される。そのために徹底してハプスブルク帝国が理想化されて描かれたこの作品は、現代という時代に対する「アンチテーゼ」とも読める。すなわちロートは、物語の舞台となるロパティニー村において、一つの理想の社会を描く。つまり、モルスティン伯爵に「指導者」を、ロパティニー村の村民にその庇護と恩恵を受ける「民衆」を代表させ、前者は私心なく喜んで人を助けようとする姿勢を通じて、後者にとって、公正かつ高貴、そして畏敬に満ちた存在であり続ける。後者は、前者がそうあることを願う自らのきわめて深くきわめて高貴な思いが満たされ、前者に尊敬と愛情を抱き続ける。神によって配置された絶対的な君主を頂点として、貴族も民衆も、権力を持つ者も持たない者も、誰もが高貴な精神を有する社会、それこそ『皇帝の胸像』という作品を通じてロートが言わんとした理想の世界であった。一方でロートは、この作品の中で描いた理想の世界が後に飲み

研究成果の概要 つづき

込まれていくことになる「民族主義」という濁流を徹底的に批判する。このようにロートは、この『皇帝の胸像』という作品において、ロパティニー村という民族主義とは一切関係のない調和のとれた「理想の世界」と、新時代の卑しい連中がはびこる村の外の「現実の世界」とを対置させ、両者の差を徹底して強調してみせる。ここにおいて、後者を生み出した民族主義から獣のような現代へと至る時代の流れに対し、ロートが次々と繰り出す批判は実に小気味よく、また峻烈である。そしてこの辛辣な時代批判こそ、亡命期におけるロートの活動の大きな柱であり、それは途中折れそうになりながらも、生涯を通じてロートの執筆活動を支え続けたのである。

また、もう一つ忘れてはならないのが、この作品には、その時代の流れに飲み込まれまいと懸命に生きる一人の人間の姿が描かれているということである。この作品が書かれる2年あまり前、小説『ラデツキー行進曲』の前書きの中に、ロートは「消え失せ、吹き消されていくものの中から、記憶に値し、同時に人間らしい特徴的なものを書きとどめることこそが、作家の義務であり、作家には、歴史が見境なく軽率に見捨てるように思われる個人的な運命を一つ一つ拾い上げるという、崇高かつささやかな使命がある」と記している。ロートはこの『皇帝の胸像』という作品で、モルスティン伯爵というまさに歴史が顧みそうにない一人の人間の個人的な運命をていねいに拾い上げることによって、「記憶に値する」一つの物語を語ったのである。

4. 亡命生活の現実

著書が発禁処分となりそこからの収入が閉ざされた上に、ドイツというドイツ語圏最大の市場を失った亡命作家たちの受ける経済的な打撃は大きく、生活の劇的な変化や亡命地における文化の違い、また、自らの主張とそれからますますかけ離れていく現実とのギャップなどからくる精神的な苦痛とも相まって、反ナチス亡命者たちは亡命生活のつらい現実に直面する。ロートにおいては、精神を病みウィーンの病院に残してきた妻フリードルの問題、パリで同居を続けていたマンガ・ベルとその二人の子どもたちとの生活上の問題、そして恐らくは過度の飲酒からくる健康上の問題などを抱えていた。それらに伴う費用に加え、普段から自分のため、人のためにと金遣いの荒かったロートは、ほかの作家たちにもまして亡命生活の間、経済的な困窮に見舞われていく。このロートの経済面はもとより、精神的な苦悩が最も深みまで達したのは、ツヴァイクへ宛てた手紙の内容と当時の活動の状況から、1936年頃であったと推察される。しかし、やはり書き続けることによって、ロートはこのどん底と言ってもいいような状況から抜け出す。その直接のきっかけとなったのが、1937年に発表された小説『偽りの分銅』であった。この作品の成功が、多少なりとも経済的なゆとりと、ささやかかもしれないが亡命後初めて評価されたことへの満足感をロートにもたらしたのは間違いない。そして、『偽りの分銅』執筆中の1937年2月から3月にかけてのポーランドへの講演旅行の際、ガリツィアに滞在し故郷の風景を目にとらえ、故郷の空気を肌で感じたことがロートに作家としての原点を思い出させ、さらには書くことの意義を再確認させ、それが苦悩の淵からロートを抜け出させる大きな要因となったのではないだろうか。

5. オーストリア併合と亡命生活の終わり

オーストリア共和国の政治体制の中に君主制国家へとつながるカトリック的な身分制国家の可能性を見出し、オーストリアの正統主義グループとコンタクトをとりながら王政復古を果たそうとしたロートであったが、それもむなしく、1938年3月、オーストリアはナチスドイツに「併合」され、かつての君主国を取り戻すという亡命以来持ち続けたロートの夢は、事実上、ここに終わりを告げる。そしてこれ以降ロートは、体調を急速に悪化させていく。にもかかわらず、例えば1938年の12月末から翌年の1月末にかけて、新聞にはほぼ毎日寄稿するなど、ロートの筆に勢いの衰えは見られず、最後の作品『聖なる酔っぱらいの伝説』を書き上げてからわずか2週間後の1939年5月、「カフェ・トゥルノン」で倒れ、44歳で長くも短いおよそ6年あまりの亡命生活を終える直前まで、ロートは一人の君主制主義作家としてナチスドイツに対し、そしてそのナチスドイツを生んだ現在へと至る時代の流れに対して戦いを挑み続けた。どんな苦境にあらうともロートが筆を執り続けたのは、先に挙げた作家としての「使命」を何としてでも果たそうとするロートの固い信念がそこにあったからである。そしてその根底に流れていたのは、祖国を失い、いわば永遠の放浪の旅に出たユダヤ人としての出自を持つロートが、その永遠の放浪者にとっての真の故郷、すなわちかつての祖国ハプスブルク帝国を失った上に、さらにまたナチスドイツによって活動の場を追われる中で、異国の地であたかも書くという行為そのものに故郷を見出そうとするかのように、作品を書き続けることによって、自分の原点、あるいは自分の存在意義を絶えず確認していたいというロートの切なる思いであった。そのロートが時代に抵抗した心の叫びと、歴史に見捨てられていくものの中から一つ一つ拾い上げた個人的な運命の物語は、まさにますますその速度を速め、どこへ向かおうとしているのかまったく予測もつかない現代という時代に生きるわれわれのために、人間らしい特徴的なものを書き残したロートのメッセージにほかならない。われわれがその現代という時代に流されまいと思うとき、その時代に抵抗し続けた一人の亡命作家の声は確実にわれわれの記憶に刻まれていくであろう。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (翻訳発表)

浅見治人 「【翻訳】 ヨーゼフ・ロート 『破壊を前にしての休息』『真夜中過ぎのピストロにて』」 [立教大学ドイツ文学専攻論文集《WORT》第36号 (2015年度発行予定)]

④ その他

2014年度立教大学大学院修士論文「ヨーゼフ・ロートの抵抗の歴史——亡命期におけるヨーゼフ・ロートの行動と作品——」 2015年1月提出